SON-DAY, AUGUST 16th 2026 WORSHIP SERVICE No.1178
単立キリスト教会 マラナサ・グレイス・フェローシップ Maranatha Grace Fellowship【MGF】Since Jan. 18, 2004
教会所在地：〒380-0802 長野市上松２丁目７−２０ ☎: 026-219-2388 牧仕：Kaz、菊地 一徳（かずなり）
https://mgfchrist.com www.facebook.com/mgf.nagano.japan jesus-mail@mgfchrist.com
MGF は、神第一主義、キリスト中心主義、聖霊主導主義の教会

礼拝黙想 Meditating on Worship

「人類は戦争に終止符を打たなければならない。それでなければ戦争が人類に終止符を打つことになろう。」

（ジョン・F・ケネディ）

A【お盆とは？】

「お盆」とは「盂蘭盆会（うらぼんえ）」の省略で、その起源は「盂蘭盆経」にあるが、これは釈迦やインドの仏弟子らの教えではなく、仏教が中国に伝播する間に中国の死霊や祖霊の供養に関する風習と、儒教の孝道の教えを取り入れた創作である。したがって、仏教学者の間では「偽経」とされている。

【盂蘭盆会と施餓鬼の教え】

「盂蘭盆」とは「倒懸（とうけん）」（「倒」＝さかさまに、「懸」＝かけられ、餓鬼道で苦しんでいる亡者、死霊）の意。「盂蘭盆経」によると、ある日、釈迦の十大弟子の一人の目蓮が、死んだ母の行方を神通力によって捜したところ、餓鬼道地獄に堕ち、逆さ吊りで苦しむ母の姿が見えたという。目蓮は水や食物を差し出したが、ことごとく口に入る直前に炎となって、母の口には入らなかった。目蓮は驚き悲しんで、釈迦に母を救う方法がないかと尋ねた。すると釈迦は「おまえの母は生前、欲張りで無慈悲な人間だった。だから今、その報いを受け地獄で苦しみを受けているのだ。母を救いたいなら、母の代わりに善行を積まねばならない。そのためには『雨安居（うあんご＝インドの雨期４月１５日〜７月１５日の 90 日間は托鉢に出にくいので、僧侶たちは寺で討論や修行を行なった）』の修行が終わって比丘（びく＝仏弟子）たちが双羅の林に集まることになる。その時、百実の飯食（たくさんのご馳走）を用意して比丘たちに施せば、その施しの一端が母の口に入るであろう」と教えた（施餓鬼の教え）。そこで目蓮はその通り実行し、比丘の全てに布施を行い、比丘たちは飲んだり食べたり踊ったり大喜びをした。すると、その喜びが餓鬼道に堕ちている者たちにも伝わり、母親の口にも入ったという。この物語は、孝道を教えられている中国人に大変喜ばれ、「仏祖統紀」によると、梁の武帝の大同４（538）年に帝自ら同泰寺で盂蘭盆斎を設けたことが伝えられている。

【お盆は非仏教的慣習】

そもそも釈迦は、死後のことなどに囚われないための諦観思想（諦めの境地）を理想とし、それを悟りの境地、ニルバーナ（涅槃）として教えた。全ては空であり、無であるとする仏智（諸行無常、一切皆苦、諸法無我、涅槃寂静）を基に考えるならば、死者の救いのために現世にある者が、善行を積み上げることによって、救ってあげることができるなどと考えるのは矛盾であり、「死者の霊がこの世に未練、執着をもっており、自分の家に戻ってくる」という迷信にとらえられ、悟りを開けていない人々の創作である。

この他、一周忌、三回忌という風習は、儒教から出たものだと言われる。釈迦は、死後の霊魂のことについては何も語らず、善因善果、悪因悪果を説いただけである。生き残っている人の善行、供養、読経、宗教儀式等で死人を成仏させ、悟りを開かせるなどということを教えた経典など原始仏教には存在しないし、本来の仏教とは全く無関係である。無論、仏教の戒律を全く守らずに死んだ人が遺族の支払うお金で追善供養ができてしまうという位牌や戒名の販売も本来の仏教とは無縁であり、釈迦の教えにも矛盾する。
また、お盆は一見、先祖を大事にする美しい風習に見えるが、せっかく飢餓地獄から迎えた先祖の霊とは言え、いつまでも家にいてもらっては困るので、３日後に送り火や灯篭流し等で地獄に追い返し、また来年３日間迎えるという、先祖を侮辱する不敬行為である。

【お盆とキリシタン弾圧の関係】

さらに、お盆が江戸時代に庶民の間に浸透した背景には、寛永 17（1640）年、徳川幕府がキリシタンを摘発するために宗門改めを厳重にし、檀家制度、寺請証文、法事参加と各家庭に仏壇の設置を義務づけたことが挙げられる。以来全国民は仏教徒に強制改宗させられ、仏事に参加しなければキリシタンと見なされて処刑された（例えば葬式で焼香が順番で回ってくるのは、キリシタン摘発の踏み絵であった）。今日の葬式仏教における位牌、戒名のシステムも江戸時代以降の悪習なのだ。これら押し付けられた「家の宗教」を多くの日本人は誤解して先祖代々の宗教を大切に守っていかなければならないものだという強迫観念にとらわれている。これも一種のマインド・コントロールである。
イエス・キリストは、私たちの先祖を含む全人類を地獄から救うために、この世を訪れ、身代わりとなって十字架にかけられ、三日目によみがえられた。これは人間の創作ではなく、歴史的事実である。

【クリスチャンはなぜお盆の行事に参加しないのか？】

●クリスチャンは、自分たちの先祖たちがみな目連の母のような意地悪な欲張りばあさんだとは信じていないから。また彼らがみな餓鬼道地獄で逆さ吊りの刑にあって苦しんでいるとも信じていないから。
●クリスチャンは、遺族が故人の代わりに善行を積むことで故人を楽にしてあげることができるとも信じてない（お盆は人間が人間を救うという考え）から。釈迦の教えに忠実な仏教徒も信じていない

ことだろう。
●クリスチャンは、地獄の釜の蓋が開いて先祖が出てくるのが１年に３日間だけで３日過ぎたら、いつまでも家にいてもらっては困るので飢餓地獄に追い返すという無情な行為をむしろ先祖を侮辱すると考えるから。
●クリスチャンは、盂蘭盆会、迎え火、盆棚、盆踊り、送り火、精霊流し等は、聖書が禁じる偶像礼拝である考えるから。ただし、いわゆる盆路作り、墓払いと呼ばれる墓地の掃除や整備はクリスチャンでも参加できる。その他、盆に迎える食事の準備にも裏方として積極的に参加することで、先祖と親族に対する敬愛の念を表現することができる。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【終戦の日に寄せて】

「戦争中、私は人間ではなかった。人でなしであった。なぜなら私は軍国主義に染まった教師であったからである」(三浦綾子)

「昭和といえば戦争ですよね。そしてもちろん、戦場で火を噴く銃口もあるけれども、それだけではない。あなたにも私にも、銃口がいろんなところから向けられているんですよ。昭和は終わっても、その銃口はいつまでも国民に向けられています」(三浦綾子　雑誌『本の窓』)

三浦綾子の遺言とよばれる長編小説が「銃口」です。この物語の舞台のひとつ「幌志内」は、10 代の綾子が初めて教師として勤めた「歌志内」がモデルです。綾子が教壇に立った「神威尋常高等小学校」は当時の国策に忠実な教育を熱心に実践していた模範的な学校でした。

「それは、全くの軍国調であったが、わたしはその生徒や教師たちの真剣さに打たれて､学ぶとはこのように折目正しく、真剣でなければならないものかと、感じ入ってしまった」
「もちろん、天皇の立派な赤子に育てるために教えています」
(三浦綾子『石ころのうた』)

「戦中、教師だった綾子は子供たちに、あの戦争は聖戦で、天皇は神なのだと教えた。 そのことを深く後悔し、『韓国や中国に行ったら、私は胸を張って歩くことはできない。日本の行った罪をおわびしたい』と言い続けていた。」(三浦光世)

「日本は侵略戦争をしていたのに、綾子も私も聖戦だと信じていた。とんでもないことでした。」(三浦光世)

「８月３０日、マッカーサーが厚木の飛行場に降り立ち、進駐が開始された。占領という言葉を、進駐というあいまいな言葉に変えて使ったのは、国民感情を刺激しないための政治的配慮からであったろうか。言葉をいかに変えようと、要するに日本は降参し、負けたために占領されたのだ。このあいまいな言葉を使ったために、敗戦のなまなましい実感は殺がれた。それは敗戦という言葉の代りに、終戦という言葉を使ったことと同様、日本人をふやけさせたのではないだろうか。それとも、もともと日本人は敗戦を敗戦としてしっかり受け止められない程弱い精神しか持ち得ない脆弱な民族であったのであろうか。」　(三浦綾子)

「戦争の恐ろしさは数々ある。その中で最も恐ろしいのは、人間が人間性を失うことだと私は思う。人間に生まれて来た以上、私たちは人間として生き、人間として死んで行く権利がある。そしてそれは義務でもある。私には殺すという行動が、真の人間の執るべき行動とはどうしても思えない。いかなる理由があろうとも、人は人を殺してはならない。この一線を守らぬ限り、人間の生活は獣の生活に堕ちてしまう。私たちは人を殺すために生まれて来たのでもなく、殺されるために生まれて来たのでもない。私たちは愛し合うために生まれて来たのだ。」(三浦綾子『わが青春に出会った本』)

「人間はしばしば妙なものを進歩であると錯覚する。大量殺戮の兵器を造ることさえ最大の進歩であるかのごとく錯覚する。戦いの最も進歩した形は戦わないということだ。人間同士が兵器によって殺し合うことなく、言葉によって話し合うことだ。それが戦いの最も進歩した姿だ。」(三浦綾子『北国日記』)

「確かだね。俺もそう思うよ。韓国に行って、俺でさえ、何となくシュンとして帰って来たものな。愛国心というものは、自分の国が大きくなればいいとか、金持ちになればいいといったもんじゃないな」「そうよねえ。国を構成する単位は、個人ですものね。要するにその個人が人間らしく生きていける、これが一番大事なことでしょう？」「夕起子、俺のいない間に偉くなったね」寛が寝ている夕起子を横目で見た。「からかわないで。わたしね、愛国心ってほんとにどんなことかしらって、まじめに考えてるのよ。少しぐらい貧しくてもね、これが日本人よ、これが日本の国よって子どもたちに言える国になってほしいの。どこの国をも侵略しない、人の命を奪わない、そんな国になってほしいの。おかしいかしら」(三浦綾子『青い棘』) Ω

＜お知らせ **Announcement**＞

★８月１９日（水）午後キッズイベント＋バーベキュー
★８月３０日（日）はディアコノス・ランチ
★９月８日（火）～９日（水）　ホームスクーリング・ミニストリーミニキャンプ
★９月２１日（月）　ユース＆ユース＋のワンデイ・イベント

MGF はキリスト狂徒の集まるキリスト狂会

「教会〔マラナサ・グレイス・フェローシップ（略称：MGF)〕はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので満たす方が満ちておられるところです」(エペソ１：２３)。「あなたがた〔MGF〕は、キリストにあって満たされているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです」(コロサイ２：１０)。